

医者から見放された障害児が半年で 150 の漢字を覚えた！

1章でもご紹介したドーマン博士の幼児能力開発は、障害児教育からはじまったといえます。脳障害があっても十分に成果を得られる教育法だから、健常児にも必ず役立つはずである、という発想です。私の場合も、いくぶん似たところがあるかもしれません。

私が、四歳半になる脳障害の女の子について、はじめて相談を受けたのは小学校の教職を退いて数年後のことです。一歳半のとき、交通事故により頭蓋骨陥没という瀕死の重傷を負い、脳に障害の残った彼女は、あらゆる施設や病院で回復不可能だと宣告されたといえます。ご両親は、せめてかなで書かれた自分の名前だけは読めるようにしようと、まず“い”から教えはじめましたが、毎日の努力にもかかわらず、一年たっても読めるようにならない、ということでした。

このとき、私の頭にすぐに思い浮かんだのが、小学校の教員時代のこんな体験でした。一年生に「青い空、白い雲」と教えますと、どのトもすぐに覚えて正しく読めるようになります。“青”“白”“空”“雲”の漢字も一字ずつ示せば、どの子も正しく読みます。

ところが、ひらがなの“い”だけだと、いくらやっても読めない子が何人もいるのです、それで、そういう子どもたちだけあとに残して、特別に“かな”の指導をしましたが、その日は覚えたように思えても、翌日にはもう読めなくなっています。

十四年間にわたる体験で、もっとも覚えの悪い子は、一年の三学期を終えるまで、ついに一文字もかなが読めるようになりませんでした。

ところが、漢字は容易に覚え、そして忘れません。それが1章でもご紹介したY君です。

そこで私は、「ひらがながまったく読めない脳障害児でも、漢字なら覚えられるのではないか」と直観し、ご両親に「毎日、一日に 15 回、一枚の漢字カードを十秒ほど見せて読ませる」という方法を試してみるようにアドバイスしました。

やり方は、次の日に、そのカードを見せ、読めたら新しい漢字カードを一枚ずつ増やしていく。そして、八枚目のカードが加わる時には、最初に読んだカードを取り下げ、以後、おさらいするカードが六枚と新しいカードが一枚というパターンをくり返す、という健常児の場合とまったく同じ方法です。

それから十日ほどして、ご両親から速達が届きました。そこには「一年たってもかなが一文字も覚えられなかった子が、この一週間に七つの漢字を覚えて読めるようになりました。どの漢字も正しく読めます。これまでは悲嘆のどん底にあったが、これで希望がもてます」という溢れんばかりの喜びが綴られていたのです。

そのおよそ半年後、私はこの女の子と再会しましたが、はじめて会ったときの、どんよりとした暗い表情が一変し、目は生きいきと輝き、見違えるほど明るい表情になっていました。そして、覚えて読めるようになった漢字も、すでに 150 字ほどにも達していました。

これは、その後、多くの脳障害児と関わっているうちにわかったことですが、漢字がこの程度読めるようになりますと、どんな子どもでも、態度や表情が目に見えて変わってくるものなのです。